



東九州支部報



ナガミズ山頂にて(4月18日)

〈 もくじ 〉

ナガミズ山・フキクサ山・合鳴山	1
上塚山からガラメキ峠へ	2
野平の峠から高堂台へ	3
利尻山と北海道	4
今春の登山	6
私の無名山ガイドブック®	6
今西錦司レリーフを尋ねて	7
お知らせ	7
事務局日誌	8
後記	8

ナガミズ山・フキクサ山・合鳴山

四月月例山行報告

園田 暉明

四月一八日(日)仕事の都合で、中断していた支部山行に一年ぶりに参加。

安部さんの車に同乗させてもらい、サニースポーツへ。五時、中野さん、安部さんの車(西、牧野、長野、園田が同乗)で出発。午後から雨の確率が高いとの天気予報が、少し心配。

国道二一〇号を湯布院町湯平へ。湯ノ平大橋で別府市からの飯田さん、遠江さんと合流。湯ノ平温泉を過ぎ、広城農道の扇山団地入り口で児玉さん、佐藤さんが合流。本日の参加者全員がそろった。

ここで右折し林道へと続く小道に入る。谷川に沿う林道周辺の木々は、芽吹きを始めたばかりである。大分市では楠の葉が萌葱色から緑へ変わっているのにと、山の季節の遅れを改めて感じる。

林道は進むほどに小石の多い悪路となる。六時四〇分、林道が尾根を横切る峠(登山口)に到着。

地図で確認すると本日の目的地、ナガミズ、フキクサのほぼ中間点の尾根の鞍部にあたり、標高一一九四mの標高点のすぐ下であった。

まずナガミズに向かう。檜が伐採されて、はげ山となった広い尾根を水平に進み、

、少し下がってすぐに、藪こぎとなる。ここを右に小さく巻いて直ぐに又、尾根に戻り、所々にスマイレの花のある自然林を進むと、すぐに頂上である。七時三〇分。

山頂はなだらかな台地で、カヤとキイチゴで被われその中に三角点がある。周辺の樹木に遮られ眺めは良くないが、南東方向に黒岳、平治岳見える。西さんの音頭で恒例の万歳。

同じルートを引き返して登山口の鞍部へ。八時三五分、フキクサ山を目指して緩い勾配の広い尾根を進む。所々にヤブレガサ、ホウチャクソウ等の山草は芽を出しているが、木々の芽吹きはまだである。ここでは、冬の一部がまだ残っている。

ふと、藤村の千曲川旅情の歌の一節

あたたかき光はあれど
野に満つる香りも知らず
浅くのみ春は霞みて・・・
が思い出された。

しばらく進むと、稜線に出てそこを右へ折れて、檜林の中を進む。放牧の牛が逃げのりを防ぐためであったのだろうか、尾根には一・五メートルほどに土が盛られ、それが万里の長城のように続いている。

尾根にわずかにあるミヤマキリシマの株の箇所を過ぎるとすぐに、尾根は水平となり三角点のある山頂に到着。九時一二分。眺めは、南方は高い檜に遮ら

れて全く利かないが、北方は灌木で、崩平山が見える。三角点を囲み再び万歳。



(フキクサ山頂にて)

ここで早い昼食。そして、同じルートで登山口の鞍部へ。途中で、西さんが切り株を利用して、年輪からの方位確認の実技講習。

一〇時二〇分登山口着。時間が早いので、近くの合鴨山に登ることになる。

林道を引き返し、途中の分岐点から左折し、所用のあるという児玉さん、佐藤さんを除いた八人で合鴨山へ向かう。しばらく行くと、鉄製の施設されたゲートがあり、やむなく歩くことになる。一時五分。こちらの林道は路面が整備されて小石等なく歩きやすい。

心配していた天候も回復。心地よい日光の中、道ばたに咲いているスマイレ、キケマン等の野草、タラ・コシアブラの芽等山菜に、会話を弾ませながら、高度を上げる。

山のベテラン飯田さんも永年この山には登っていないとのこととで、地図と地形を見比べながら登山口を探す。

一時五五分、それらしい地点から急斜面にとりつき尾根に上がる。道のない、ジャングルを思わせる大木の中を進むとすぐに、九電の高圧送電線用鉄塔の下にでる。ここで小休止中、天候が急変、小粒の雨が落ちてきたため、あわてて出発。

雨はすぐに止む。鉄塔からは送電線の巡視路を登ることになる。ブナの大木の原生林が現れ、みんなが異口同音に喜びの声を上げる。

わずかの野草、落ち葉、適度な光線、芽だし前の裸の大木等の光景が醸し出すのか、幸福感いっぱいである。くじゅう山系では、黒岳、坊がつるに通じる暮れ雨ルート等でブナの原生林が見られ、それぞれに趣、良さがあるが、それらとは異なる、それ以上の感動を覚えた一時であった。と同時にブナの大木に向かつて、人間のエゴの犠牲になることなく、いつまでもここで、生きながらえてくれと語りかけていた。

しばらく行くと巡視路と別れ

て原生林から杉林に入り、急な斜面を登るとやがて勾配も緩やかとなり稜線に出る。

一面の灌木の隙間をしばらく進むと、一二時五五分頂上に着く。



(合鴨山頂にて)

ここは樹木が低いことから三六〇度の展望が利く。三俣、涌蓋、崩平等が見える。

ここでも三角点を囲んで万歳。この三角点は周囲を四つの石で囲われている。西さんによると、これが三角点設置時の元の姿であるとのこと。

同じルートで登山口へ。鉄塔の箇所へは、林道から作業用のルートが伸びており、これを利用して林道へ出る。一三時三五

分。

林道を駐車地点まで引き返す途中、遂に小雨が落ち始め、道を急ぐ。合羽を着るうかと迷っている内に一四時一五分ゲートに到着。今まで待ってくれた空に感謝。

合鴨山でのブナとの遭遇が強く心に残った山行であった。

参加者：安部、飯田、児玉、佐藤（正）、園田、遠江、中野、長野、西（孝）、牧野

上塚山から ガラメキ峠へ

(五月月例山行報告)

中野 稔

五時サニースポーツを出発。五月晴れと思い、インターネットで五月のデータを調べると、快晴は七日、晴れは五日、曇りは九日、雨は一〇日でした。インターネットを活用すれば、自宅にて国立図書館並の情報が得られる。三〇年前なら考えられない事です。

後藤号と安部号にて日田のインター出口のローソンに六時過ぎに到着。順次飯田号と佐藤号

が集合。国道二一七号を中津へ向かって、約五・五キロで右折して、県道一〇七号を約五・五キロ北北西へ走る。小野殿町辺りで右折して、釜ガ瀬溪谷沿いにのぼり、ガラメキ峠を目指す。ガラメキ峠に佐藤号を残し、三台で上塚山の東の谷を目指して行くと、県道よりも立派な舗装道路が出来ていた。

上塚山の登り口の、林道脇に車を止めた所にはハコネウツギが静かに咲いていた。標高八〇〇メートル辺りから、テープを頼りに谷に足を踏み入れる。

九州の山々は八割以上が植林されているのではないかと思えるぐらい、自然林が少ない。林道が無い山は無いと信じている。そのお陰で分水嶺登山は楽をさせて貰えるから、先ずは感謝。

一旦分水嶺上の鞍部につき、そこから北へ急登となる。七時二〇分過ぎに登り始めて、八時に上塚山山頂に着く。直径五、六〇センチのカヤの太木がさり気なく立っていたが、山頂付近だけ自然林が残されていた。植林も数年一度は枝打ちしなければ、商品価値がなくなると聞いたが、高く売れそうな木々は見当たらない。

山頂から鞍部に引き返して、そのまま南に稜線をたどる。分水嶺歩きだ。西側の植林は偏西風のせい、台風のせい、は知らないが、倒れて行く手を何度かさえぎられた。上塚山からガ

ラメキ峠まで、直線では二キロだが、相当のヤブ漕ぎを覚悟していた。しかし、この稜線は山国町と日田市の境界の為か、比較的歩き易かった。殆どの中央分水嶺トレッキングは、ヤブ漕ぎを覚悟しなくてはならないと思う。



(上塚山頂にて)

携帯GPSのお陰でポイントが、二万五千分の地図で緯度経度を確認していれば、道が無くても迷う事は無いと思うが、道信が迷いの始まりなのかもしれない。

稜線上にも様々な草や木々が花が咲き乱れている。殆どは名も知らぬ存在なので、山岳会のメンバーに尋ねながら少しずつ

学んでいます。

白いスケルトンの様なギンリヨウソウ、何故だか葉っぱが一枚だけのカンアオイ、緑の大きな葉っぱ達の中に小さな白い花を咲かせているヒトリシズカにフタリシズカ、小さな薄紫の花を並べるタツナミソウ。

上塚山から一・二キロぐらい歩くと、東斜面に銭に成る木のエンジュの植林地帯に出くわした。植えたばかりで人間でいえば、幼稚園児ぐらいだ。鹿避けネットで囲まれているもの、効果の程は未知数だと思う。ネット越しに中摩殿畑山、釣鐘山などが見えた。

エンジュの植林地帯は後二ヶ所ほどあった。時折り垣間見る仏来ノ山。懐かしい友達に出会ったようにはしゃぐ姿に、青春の輝きの残光を見た気がした。一〇時三十分にはガラメキ峠に到着して、林道脇の峠の石碑を見学する。これは昔は上の峠にあったそうだが、林道が稜線をオープンカットしてしまったため、ここに移されたようだ。

此処で昼食となるが、一班のリーダーはその間にも鎌を片手に草刈に汗を流していた。植林帯に入るまでの藪退治のようだが、昼食後、今日の予定はここまでに進むことになった。

先に進むことになった。分水嶺の稜線上はルートが判然としないうところが多く、読図能力が試される。特に一人で行

くならなのおさらだ。案の定、ガラメキ峠から八四六・八m地点を目指す、五〇分ほど行つたところで尾根を間違えてしまう。時間的にはまだ早いので引き返してさらに分水嶺をたどる案も出たが、今日の目的のコースは完了しているのでこれで投了と相成る。

昼食時に峠では何故か福岡のミドルグリーンウオークの御一行が、四名ずつ一二名ぐらい次々と峠に降りてきた。石碑付近で何やら話していたが、やがて彼らは来た道を引き返していった。

参加者：安部、飯田、今山、後藤、佐藤、園田、遠江、長野、中野、那須、西

野平の峠から

高堂台へ

(六月月例山行報告)

長野 珪子

六月二十七日(日) 午前五時、安部車三名、中野車三名でサニールを出発。大分ではまだ雨は降っていないが、天気予報では日田・玖珠地方は午前中雨、午後は曇りと言っていたとおり

に、玖珠で小雨となった。玖珠町長野の糸福号の牛の像のところまで飯田車二名と待ち合わせ。国道二一〇線から県道四三号線、そして四八号線へと向かう。

山下の集落のはずれで一旦停車し、帰りの足のために、中野車を中塚田能原牧場の奥の下山予定地点の牧野道に置くため、飯田車と一緒に待っていた六名はさつそく雨支度。戻ってきた飯田車と安部車二台で県道日田玖珠線(四八号)を西に向かう。日田市に入ると竹の林橋を渡るとすぐに右折し、林道に入る。雨で濁流となつた溪流沿いに走り、野平の集落を過ぎると道は少し広くなり、やがて峠に到着。峠の広い道の脇に車を駐車し、午前七時五五分、雨の中、野平の峠を発する。

峠から稜線沿いのびている、緩やかな登りの林道をたどって行く。草深い林道はずっと稜線の上を通っているが、所々少し稜線からはずれるところがあり、そういうところはヤブを分け入り、忠実に分水嶺をたどる。

手入れの悪い植林地や、雑木林、背丈ほどのカヤ、低いササなどのヤブをかき分けながら、稜線を探しながら進む状態。時折りオカトラノオの白い尻尾、淡紫色のやわらかそうなアザミ、紫色のウツボグサなどが目を楽しませてくれる。のどかに鳴いていたウグイス

が急にけたたましく、警戒警報を発したりしている。私達を不審者と思つてどこかでじつと見ているのね。

八時一五分、標高六三九m地点の少し開けた所で小休止。ここまで約一キロメートルは歩いた？ここで現在地の確認と雨具や衣類の調整をする。

さらに雑木林の中を、ナタではらつたりテープをつけたりしながら進むと緩やかな下りとなる。左手前方に鹿嵐山や鹿熊山などを見ながら下ると、前方で何やら発見したと言っている。

草深い林道脇の茂みの中に、埋もれるように車が！スワ事件？園田さんがさっそく中を覗き込む。ナンバーブレットもなく、捨てられた車のようで一同ホッとす。長居は無用とばかりに先に進むが、そこから先はいっそうヤブが深く、ほとんど道は分からない。

ヤブを分けながら緩やかに登っていくと、九時四五分、右の方に月出山岳がよく見える開けたところを通過。そして、天然林の中を登っていくと林道に出た。この林道は田能原牧場からきたもので、分水嶺稜線を越えて北の方に回り込んでいます。

広い稜線の北側に高さ一五センチ、幅七センチほどのセメント柱がある。(北緯三三度二〇分〇二秒、東経一三一度五分二秒)境界の杭か？
林道から稜線に沿って植林の

中に入る。ここからしばらくは今日初めての急登となる。稜線をまっすぐ登っている獣道は雨で滑りやすい。傾斜が少し緩くなる広い稜線で、何度も方向確認しながら進む。やがて傾斜がなくなり、樹林の中の広い平らな頂に着いた。七二五・六mの三角点のある頂に着いたはずである。三角点はさてどこに？みんなで探す。「ここにあって！」東に二〇mほど進んだところで遠江さんが発見する。(二〇時一〇分)



(高堂台稜線の三角点にて)
杉の根元に高さ二〇センチほどの三角点、四個の石に囲まれて立っているが、心ない人の仕業か、角が大きく割られて一見単なる石と間違えそうなほど

で、何等かか読めない。(北緯三三度一九分五六、六秒、東経一三一度五分三〇、四秒、北の方向は誤差三度)

ここで記念撮影をした後、少し早い昼食。小雨が断続的に降る中、皆食事に集中していたため、パンザイ、ヤツホーは思い出した西さんが一人でしていた。

一〇時五〇分、山頂を後にしてまたも東へ東へ。スギ林やカヤ、ササのヤブこぎを繰り返しながら、二、三度緩いアツプダウンの後、スギ林の中の広い台地状の頂に着いた。どこからサイレンが聞こえてきて、時計を見ると一一時三〇分。ここが標高七四五mの、今日の最高地点で目的地の高堂台である。小休止の後再び東へと向かう。

稜線に沿って築かれた古い土塁に沿って進むと、クヌギの点在するカヤ野となり、やがて稜線を真横に横切る有刺鉄線の柵が現れた。これをくぐると牧草地内で、有刺鉄線に沿うように南に方向を変えて山腹を下ると広い牧場が開けてきた。

牧野道に出て東に進むと一〇分ほどで牧場の柵のゲートに行き当たった。鍵はなく、開けて出るとその向こうの農免道路の脇に中野車が待機していた。運転者が三人乗って野平の峠まで車の回収に行く。残りの五人は、黒牛三〇頭ばかりに見送られて、道端の栄養満点のワラビを積みながら舗装道路を歩い

て下る。三〇分ほど下ると中塚大日不動尊への分岐に着き、ここで車を待つことにした。小雨は相変わらず降り続いていった。

雨の中、現在地の確認や、ナタで切り払ったり、目印のテープをつけたりと、西さんや男性陣の皆さん有り難うございました。今回も楽しい山行でした。(経緯度と高度はGPSから読んだものです)

参加者：安部、飯田、石川、園田、遠江、中野、長野、西(孝)

利尻登山と北海道

八重康夫

私以外、北海道にはまだ行った事が無いということで、飛行機のバスデール割引を使って家族で北海道に行くことにした。これを使うと、誕生日の前後付近で約二週間以内だったら、本人を含めて四人が、一回一三、〇〇〇円で国内どこへでも飛べるのである。

長男が割引の本人なので、札幌の往復を一緒にし、私と家内はそれから利尻へ飛び、長男は網走、知床方面に行き、帰りにまた札幌で落ち合った。その後、

三人で観光バスに乗って、皆が希望した美瑛・富良野を観光して札幌↓福岡↓大分と帰るスケジュールであった。

私たちが福岡を朝一番でたつて、利尻については二時半であった。早いものである。着いた時は曇っていて、何も見えなかったが、夕刻になると、素晴らししい利尻富士が姿を現した。



(利尻山)

夕食後、宿から夕陽ヶ丘という所まで二〇分程歩いていった。七時過ぎが日没時間だったので小走りで急いだ。暑くはなかったが、小高い丘に登ると汗ばむくらいだった。おかげで間に合

い、礼文島に沈む夕日と、利尻山を見ることが出来た。



(夕日)

次の日、四時五〇分に宿の人が、登山者約一〇名をマイクロバスで利尻北麓野営場まで送ってくれたので、ここから出発した。家内は島内観光することにした。

記録はボイスレコーダでする予定だったが、途中、ボイスレコーダがオーバーフローしているのに気づかず、記録がすべて消えていた。このボイスレコーダは一杯になると、前のが前部消えるシステムになっていたらしい。おまけでもらったのは記録時間が短くて、やはりだめだと思った。時間はデジタルカメラからなんとか判定できたが、前半の歩数は、途中気づくまでわから

ないところがほとんどとなった。ちようど五時、登山口を出発した。最初ゆっくり歩くつもりだったが、ペースが少し早めだった。しかし今回は事前にかなりトレニングが出来ていたの

で、それほどたえななかった。甘露泉まで、登山口から四〇〇mとあったが、歩数計を〇にするのを忘れて、甘露泉から〇歩としてカウントした。ここで泉水を飲んだが、まだ歩き初めのためかそれほどおいしいとは思わなかった。また、冷茶を一五、お湯を〇、八、パックジュースを三五〇cc用意していたので、水の補充の必要は無く、先を急いだ。四合目から五合目の間が長かった。五合目で休もうと思ったが、なかなか着かず、ついに手前で小休止を取った。

途中かなりペースの速い、元気な札幌からの女性二人と少し話し、同じ感想であったことが確認された。五合目は休んだところから直ぐだった。

六合目(第一展望台)は見晴らしが良かったが、早々に出発した。その後のピークが長官山と思っただけ、そこが第2展望台であった。ここも早々に出発して、長官山に着いた。ここから利尻山の眺めは素晴らしい。登頂意欲をそそられた。

長官山から右に巻くようにして少し行った所に避難小屋があった。ここから先、やや疲れ気味になったが、前に行く単独登

山者の方のペースがなかなかよ

く、それについていく形を少し取ると、随分元気が出た。不思議なものだ。九合目で小休止を取った。もうついた気になっていたが、ここからが正念場と標識にあった。確かに、ロープをつたないながら、足が埋まりこむような小石のガレ場が続く、結構時間がかかった。途中、沓形分岐の位置を確認し、帰りはこちらを通りたいなど思いながらさらに直登を続けた。程なく、山頂に着いた。五時間かかるところ、三時間三〇分で登ったから、まあまあペースである。

雲が部分的に低くあり、霞んでいた。遠くの景色がずっと見渡せるといわけにはいかなかったが、こここのところの天気では最高に近い良い天気だった。

山頂で、早い昼食を取って、降りることにした。宿の人から沓形に降りるのは危険だから止めた方が無難ではないかと言われていたが、駕泊にピストンして、非常に多くの人とすれ違

うのがうとうといのと、やはり沓形コースも歩いて見たいという思いから、こちらを降りることにした。数日前までは、崩壊のため通行止になっていたと言

だから随分悩んだ末に、思い

きった。注意しながら降りて行ったが、さほどの難所も無く、祖母・傾などのどこにも見られる難所とさして変わりはないと思っただけ、途中、ボタンキンバの群落があり、ほとんど人も出会わず、快適な山歩きが楽しめた。

解説書によれば、三眺山から下は楽勝とあったが、これが曲者だった。確かに人に会わないのは静かな山旅には良いが、道が荒れている。道幅も狭い。片靴の幅だけしか足を置けない部分も多く、交互にまっすぐ足を進めねばならないところも多かった。さらに礼文岩の下、七合目避難小屋から下は、ズルズルべつたりの道が続いて閉口した。

祖母直下の所に、水が流れているガレ場の通りにくい所があるが、このような部分が、延々と続くのである。やっと良くなっ

たかと思うとまた始まる。結局、見返台登山口の車道に出るまで続いた。登山口着、一二時五一分、約八時間弱で回った。歩数計は甘露泉から二五、四八五歩であった。

のかもしれない。しかし、やはり名山である。また季節を変えて是非登りたい。雪が積もった時で、融けていなかったら、かなり歩きやすいのかもしれない。でも九州の雪山とはわけが違うだろうから・・・。

本当はこの日に礼文島に渡りたかったが、天気不良の場合のために一日余裕を取っておくことと、ちようど良いフェリーが無かった。利尻に二泊することにした。次は稚内に泊まる予定だったので、礼文では歩く時間が無く、車のみでの観光となった。

まだ随分花が楽しめたが、写真の実力不良のため、アップに耐える花のデジタルカメラ写真はほとんど出来なかった。

稚内では、もうここには二度と来ないだろうと思いつつ、本土最北端の宗谷岬などを見て回った。観光バスはなんと私と家内の2人だけの貸切状態だった。九州は暑かったみたいだが、ここは天気も悪かったこともあって、手がかじかむくらい寒かった。

札幌で長男と合流して、次の日、観光バスで美瑛・富良野と回ったが、遠く大雪山系、トムラウシ、十勝連峰の眺めは素晴らしい。花もきれいだと思っただけ、遠くの山並みばかり眺めていた。いつか是非是非あれらの山々にも登りたいと思つてここをあとにした。

今春の登山

安部可人

二月四日 独り、しあわせの丘、サテライトに駐車。コンクリートの建物の裏、気持ちはよくないがそこから入る。親が子を背負って登った昔を思う。上に行くとその道がはっきりと残っていて、廃道にはもったいない。一時間一〇分、突然宇曾神社の桜の木のところに出た。残雪あり。全くテープはなかった。

二月八日 高場山。西、伊賀同行。

二月一二日 家内と星岳へ。材木集積場に駐車。左に入る。テープなし。一時間もかけて残雪の中を山頂着。三角点は見あたり、代わりに安武氏の代用品がある。

二月一五日 月例山行参加。
二月一九日 父死去 しばらくお休み。

三月九日 解禁。のびゆく丘より独り、障子岳へ練習。

三月二一日 月例山行参加。
三月二九日 長野、今山同行。

平石經由広域林道に入る。九六〇m地点、西の尾根からゆるやかに城ガ岳へ、四〇分。小雨で眺望は全くなし。一〇八五m(標高点)の下の陰陽席を通って下山。

四月八日 独り、七瀬川の私

の畑から遠くない、内植田集落

の左はずれの家の前に駐車。急な林道一〇分で行き止まり。貯水槽(直進すると滝で終わる)右へ三〇メートルから入る。赤テープ全くなし。(少しつけ

た)間伐作業が四〇〇m地点までつづき、作業用の白テープはある。上へ、道はよい。四八〇

m地点で尾根に合流。懐かしのリレー登山のテープを見つげる。一時間半の地点。左に直角に方向を変えると霊山は近い。

四月一三日 独り、飯田さんに聞いた通りにいくと、三〇分で簡単に三等三角点のある大竜山に到着。(山名標識はない)

四月一八日 月例山行参加。
四月二二日 石川、林、浜崎同行。彦ノ内トンネル入り口の手前に駐車場。鳥居から入る。よく整備され日陰できもちの良いルートである。一時間二〇分で彦岳頂上に着く。オキナグサはわずかしがなく貧弱。

四月二六日 西、石川、林、浜崎同行。大吹鉱山跡の駐車場から頭巾岳へ、かれ沢をつめる。一時間二〇分で五葉岳との中間点に着く。左へ二十五分で頭巾岳に着く。アケボノツツジ群落すばらしい。五葉岳、お姫山は枯れ木で淋しい。一五一七m地点すぐ下で右へ大吹鉱へ下る道が、河鹿荘の主人たちよって、ササが切り開かれ快適。御化粧山經由組と別れて独りで下山。ブナ林が美しく、50分で駐車

場着。

四月三〇日 石川、林同行。平成一四年月例山行、安藤セツさんとリタイヤして以来の倉木山へ。鳥岳トンネルの先二キロ、左手に沢山テープが見える。ここ三七五m地点に駐車。沢を二、三回渡る。五〇〇m地点から倒木(間伐木)の中の苦しい登り、二〇分。あとは快適な登り道。大汗をかく。テープはありがたいが、読図が不要で達成感が無い。二時間で頂上。

(注意)その先五〇メートル進むと、高いところの岩場からコブとなつて見えるのが障子岩(前障子)か・・・眺望はすばらしい。このあと鳥岳トンネルから四〇分、鳥岳着。渡辺氏案内の巢石山がよく見えた。(赤テープは必要以上につけないようにしたい)

私の無名山ガイドブック

飯田勝之

いくつかのバリエーションルートについて

指山から三俣山へ

指山は九重の表玄関(飯田高原)にせり出して、一番目立つ立場でありながら、その背丈の低さと、丸い姿が、後ろの三俣

山にだぶって隠れてしまい、九重連山の中では一番目立つところになりながら、もつとも自己主張の弱い山である。



(長者原より指山と三俣山) この山はその目立たなさで低さから、以前はほとんど訪れる人もなく、実に静かであった。もちろん以前は決まった登頂ルートもなく、三俣山北西の谷沿いに細い踏み分け道がある程度であった。

私が指山に最初に登ったのは、三十数年前で、三俣山の山頂から遙か下の指山を眺めていて、急に思いついて立ち寄ったのが最初であった。その時は、大鍋の西側の鞍部からガレた谷沿いに下り、指山と三俣山の鞍部を経て山頂に立ち、その後鞍部から北に林の中を下り雨ガ池越のルートに出たのを思い出す。

それから十数年ほど後に、当時わずかな踏み跡がある程度の三俣山北西の谷のルートで指山に登り、鞍部から大鍋の北側の縁に登ったことがある。その時には鞍部の茅野の中に獣道のようなわずかな踏み跡があり、大鍋の縁に登るかすかな踏み分けができていた。

今日では、指山自然観察路から立派な道ができており、静かな山頂も花の時期には結構な賑わいを見せるようになってきた。

今年の五月のある日、私は久しぶりに指山から三俣に登ってみた。ルートは三俣北西の谷の鞍部に入り、砂防ダムの横の鎖のゲートの少し先から左に入る工事用の広い道を谷に向かった。この広い道は大きく迂回しながら上の方まで続いて入るが、ゲートから十分ほどいくと、車道が大きく右に遠回りしているところから、谷沿いの林の中に古い踏み跡のルートがあり、目の印のテープも点々と残っている。谷の左岸沿いの、気持のよい天然林を十五分ほど登っていくと、急に目の前に車道ののり面が現れ興ざめる。ここがこの車道の終点で、谷の砂防ダムの工事のためにつくられたものである。

ここからいったん枯れ谷を下り、古い砂防ダムの上を右岸に渡る。この谷沿いの林内には、

以前はナツツバキがたくさんあり、六月末頃から七月にかけて、白い花が谷いっぱい咲き広がり、ちよろこのあたりから谷を見下ろすと実に見事であった。今日では砂防ダムの工事で谷の木々が伐採されて見る影もない。また、谷を挟んで前方の、指山南面の絶壁は、秋の紅葉、春の新緑時はその眺めは絶品である。右岸に渡ると林の中をジグザグの急登で、再び大きな岩の累々とした枯れた谷に出る。谷を直登していくと再び右岸の林に入り、アセビのトンネルの中を数分急登していくと、茅野の台地に出る。三俣山と指山との間にある広い鞍部の一角である。カヤとノリウツギの中に道が二つに分かれてつけられている。左にとれば一〇分足らずで大きな岩のある指山山頂である。鞍部に引き返してそのまま直進するのが、最近かなり通る人も増えて、すっかり磨かれてきた三俣山へのルートである。鞍部の樹林の中をジグザグに緩い登りから、次第に急な登りとなり、指山から三〇分ほど登っていくと突然目の前に大きな岩の壁が現れる。一〇年ほど前までは、岩や木の幹や枝につかまりながら、七、八メートルほどの岩場をよじ登る所であったが、その後ロープが張られて、今年私が通った時には立派なアルミの梯子が取り付けられていた。残り少ない九重の、こうした

野趣あふれたルートも、いつの間にか無粋な道に変えられてしまっている。この後は林の中を急登が続き、シヤクナゲが現れ、足下にホツツジなどが現れるとほどなく鍋山北側の縁である。梯子の岩場から約三〇分である。この日私は、ここからいったん大鍋西の鞍部に下り、三俣の三角点山頂に立ち、南の山頂に登ってピールを空け、昼食のあと大鍋の東を巻いて、小鍋を巻いて、一周した後、舞鶴尾根新道と名付けられたルートを下った。このルートは最近開かれたもので、わずかに踏み跡のある程度の急な下りを、漕ぎ約三〇分で指山自然観察路に出た。(舞鶴新道は現在ほとんど完全なブッシュ状態です)



今西錦司レリーフを昇ねて

西 孝子

六月十一日(金)ダイヤモンドフェリー、午後四時発、台風のためか女性専用室には一人だけ、こわいと思っていたら「私達は団体ルームですが、ここに来てよるしいでしょうか？」と二人入ってきた。

十二日午前五時神戸港着、京都植物園着午前八時、ピスタリーで近くを散歩。コンビニでパンのみを買う、ザックと登山靴でトレーニングと、歩き続けること二時間半、情報ほどの台風ではなくて一安心。

十一時、京都支部長横田様の車で、斉藤厚生元会長と同乗し北山へ、四回目の道である。川沿いに民家が飛び、道せまし北山杉と自然林の緑の濃淡が一幅の絵である。

学生の頃の今西先生が歩いた道だと思つくと、心うきうき、下車して小さい沢の小道を、流れを渡り、草を踏み、ゆっくり一時間、北山荘着、昼食をすませ、レリーフまで五分で下る。

岩は苔が付き、下は綱で石垣がある。レリーフを守る会の人達が毎年努力したあとが見られる。

縦・横二メートルの岩が落ちそうな気がしていた。(除幕式の時)作業開始午後一時、ゴム長靴で沢に入り、大きい石を投げ、小石を運ぶ、石積みを上手にする人と、手分けして二時間、土手に石段をつけて、石を草や苔でおおい、みな満足そうな顔でしばし眺める。レリーフの顔も「よう来たなあ」と笑っている。



小屋にもどり、夕食の用意、沢の水も美しく、人通りのない所である。鳥の声、白いうつ

きが咲いている。炭火の焼き肉、「月の砂漠」今西さんのあごは長いよ、ロングロングあご」等歌い、深夜まで飲み、さわぐ。暗がり登ってきた人にレリーフの変わりようを聞くが、気づいていない。

十三日、午前七時朝食、各自持参のものを食べ、荷物を持って小屋を下る。レリーフに祭壇をつくり、大きい青竹の筒に花を生ける。また一人奈良より来る。午前一〇時、本願寺別府別院におられた上原泰行会員(東九州支部)の読経。南無阿弥陀仏・・・。一五日が十三回忌

である。「先生また来ます」一〇時四〇分、直谷を下る。京都市内のお墓参りをすませ、大分へは一日午前中着。京都大学霊長類学に入学する学生も、先生のことを知らない人がいるらしい。毎日の暑さで石にかぶせた草や苔はどうなつたらう・・・。 ※次号より文化勲章受章者の全集にならない、エピソードをみなさんにお知らせしたい・・・。



お知らせ

八月月例山行のご案内

- ・月日 八月二十九日(日)
- ・目的地 釜ヶ瀬山から所小野山へ(日田市と山国町境)

・ 出 発 午前五時サニー発

九月月例山行のご案内

・ 月 日 九月二十六日(日)
・ 目的 地 大石峠から一尺八寸山へ(日田市と山国町境)

・ 出 発 サニー午前五時発

十月月例山行のご案内

・ 月 日 一〇月二四日(日)
・ 目的 地 中の原山から立羽田の峠へ(玖珠町)
・ 出 発 午前五時サニー発

※ いずれの山行もヤブこぎが予想され、途中の水場は期待できませんので、ヤブ歩ききの服装と、十分な水を準備しておいて下さい。

青少年体験登山の実施

八月一日に実施する予定でしたが、今年の青少年体験登山は、台風一〇号のために延期しましたが、あらたに次の通りに実施することになりました。

・ 月 日 八月二二日(日)
・ 集 合 大分駅前午前七時までに。出発七時一〇分
・ 行き先 久住山
・ 参加費 高校生以下一〇〇〇円

一般 三〇〇円

その他の詳細は当初の計画通りです。会員はもちろん、青少年を始め一般参加者を誘って参加して下さい。

新入会員の紹介

佐藤壯悟(会員番号14019)
住所:大野群三重町秋葉七〇一
TEL(自宅)0974-22-2419
TEL(職場)0974-22-0660

全国支部懇談会のお知らせ

・ 月 日 一〇月二日(土)三日(日)
・ 場 所 熊本県(熊本大会)懇談会場 熊本市(熊本交通センターホテル)
・ 山行場所 阿蘇高岳
・ 参加費 一八、〇〇〇円
・ 参加申し込み 八月一〇日までに支部事務局へ
詳しくは事務局にお問い合わせ下さい。

※ 分水嶺踏査担当の各班リーダーにお願ひ

各担当区分ごとの踏査計画を、支部事務局まで提出して下さい。また、実地踏査を行った場合は、その都度事務局へ報告書様式に

より提出して下さい。

事務局日誌

○五月一日(水) ……日本山岳会総会
○五月二日(土) ……支部役員会
○六月三日(水) ……第四班分水嶺
○六月六日(水) ……支部役員会
○七月三日(金) ……支部役員会

後記

○ 梅雨の間は白い花でしめられていた野山には、梅雨明けとともに色々なあでやか彩りの花に替わり、特に暑さが極まるにつれ、赤い花がよく目につくようになりました。
○ そんな中にも道沿いの山林によく目立つのがネムノキです。「合歓木」と書きネムノキと読ませ、どこか風情を秘めています。
○ ネムノキに関して有名な芭蕉の句があります。奥の細道の中で詠まれています。
象潟(きさかた)や
雨に西施がねぶの花
梅雨明けの原つばに小さな

ピンクの花が螺旋状にツイた草花が点々と咲いていました。ネジバナ(掬花)と呼ばれていますが、そこに在ることを気付かされるのは一年のうちこの時期だけです。

○ 小さいながらランの一種(ラン科)で、この花の特徴は何と言っても、螺旋形の花の付き方にあります。

○ その名の通りに掬られていくことです。この螺旋形には右巻きと左巻きの両方があり、右巻きが多いとか左巻きが多いとか、諸説ありますがほんとうはどうかのでしょうか？実際に調べてみましたが、ほとんど同数存在するというのが私の見解です。

○ ネジバナの別名をモジズリと言います。これは「信夫綱摺(しのぶもじずり)」に由来すると言われます。信夫綱摺というのは、陸奥国信夫郡(しのぶぐん・現在の福島市あたり)でかつて作られた、ねじれて絡まったような文様の染め物のことで、百人一首に「陸奥のしのぶもぢずり誰ゆえに乱れむと思ふ我ならなくに」という歌があります。

○ 七月十七日からの三連休にを利用して北アルプスの徳本峠を訪れました。折りから、北陸地方に停滞していた梅雨前線のおかげで、絶好の山旅とは言えませんが、あこがれていた霞沢岳にも行っ

てきました。
○ 二泊した徳本峠の山小屋は、今でもランプしか使われておらず、古い風情と静かなたたずまいに、山屋の旅情を誘うものがありました。



(K・I)

日本山岳会東九州支部報 第26号

2004年(平成16年)7月25日(日)

発行者 梅木 秀徳
編集者 飯田 勝之
発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-16
サニースポーツ内 西 孝子方
TEL・FAX 097-532-0926

題字 佐藤 正八